

14. 中宮における防火と火の番

池 田 直 子

- I はじめに
- II 中宮の防火対策
- III 火の番
- IV 人々の防火意識
- V 不在世帯と火の番

I は じ め に

中宮では火災予防に力を入れている。そのきっかけには1945（昭和20）年に起こった大火がある。集落のほとんどもを焼き尽くす火災で、当時100戸以上あった家のうち、10戸ほども残らなかったという。それ以来火の管理が厳しく行われてきている。防火対策の中心となっているのは火の番であるが、これは大火以前から行われていたそうである。100年も150年も前からあると言われる火の番に対し、現在の人々はどのように取り組んでいるのか。中宮で行われている他の防火対策も取り上げ、人々の防火意識、火の番が果たしている役割について考えていく。そしてさらに、中宮以外に第2の住宅を持つという居住形態と火の番との関わりについても見ていきたい。

II 中 宮 の 防 火 対 策

中宮で現在行われている防火対策と言えるものは火の番、子供による火の番、鎮火祭、裸火の禁止等である。各々について以下にその内容を説明する。

1. 火の番

火の番は、当番の者が1日3回、集落内を一定の順路に従って回り、区民に火災予防を促すとともに異常の発見に努めるというものである。当番は各世帯から1人ずつ、2人1組になって順に行う。火の番についてはⅢで詳しく述べる。

2. 子供の火の番

春から秋にかけて、子供会でも集落内を火の用心を呼びかけて回る。これは特に当番などは決まっていない。火、水、金曜日の夕方5時頃、子供達が集まって「火の用心」と言い鐘を鳴らしながら回る。このような子供達による火の番は以前から晴天が続いたときなどには行われていたそうだが、現在の形で始まったのはごく最近である。というのは、一昨年頃不審火があったため、子供達の防火意識を高めなければという話が区の委員会で持ち上がり、子供会で火の番をさせることになったのだという。

3. 鎮火祭（焼け祭）

中宮で大火があったのは1945年4月28日だが、毎年この日に焼け祭といわれる祭を行っている。神主におはらいをしてもらい、また、自警団が中心となって消火訓練をする。どこかで出火したとの想定で朝サイレンが鳴らされると、自警団は全員外に飛び出し、放水訓練を行う。この訓練には、自警団だけでなく一般の人にもできるだけ参加するよう呼びかけていると聞いたが、実際には参加していないらしい。とはいえ、中宮では現在青壮年団全員が自警団員を兼ねているため、子供と高齢者を除くほとんどの男性が毎年消火訓練を行っているということになる。

その他、焼け祭の日には一日中自警団が区内を回ったり、自警団、婦人会で消火栓の点検や防火水槽の掃除をしたりする。なお、消火栓はこの日だけでなく、自警団が毎月1回点検をし、冬期は雪に埋まらないよう除雪している。

4. 裸火の禁止

中宮では集落内において屋外で火を使用することを禁止している。くわえ煙草やたき火、花火などをすることはできない。「火の用心!! 当区内は裸火（くわえたばこ）の通行を、禁じておりますので防火に御協力下さい。中宮区」と書かれた看板も立っている。区民以外の人でもこれらをしているのを見かけたら注意する。

ただ、スキー場が開設されて以来、スキー客から花火やバーベキューをしたいという要望が出てきたため、吉野谷村地域振興公社などが管理しているスキー場の範囲内ではその責任において行っても良いということになった。中宮の人々に聞くと「スキー場の駐車場の所では良いが家のある所では駄目」という話であった。

Ⅲ 火 の 番

次に、中宮で行われている火災予防の中でも最も重要であると言える火の番について述べる。まず火の番とはどういうものか、どのように行われているか等を説明し、さらに聞き取り調査をもとに、中宮の人々が火の番に対しどのような考え、意識を抱いているかということも合わせて考えていきたい。

先にも書いたように、火の番とは、区民が順に当番になって一定の時刻に集落内を巡回し、火の用心を呼びかけるとともに異常の発見に努めるというものである。非常に古くから行っているらしく、いつ始まったのか尋ねても、「さあねぇ、ずっと昔からある。生まれたときからあったからねえ」という返事がほとんどであった。1945年の大火が起こったために始まったというわけではなく、それ以前からあったものだが、大火以後はより厳しくなったのだという。火の番は、中宮区民の条件として義務づけられている。

当番は各世帯から1人ずつ、2人1組で巡回するのだが、その組合せと順番は区の委員会で決定され、区長により予定表が作成される。しかしいてい近くの家どうしが組になり、毎年それ

ほど変化はない。現在64世帯32組編成で、各世帯はほぼ1月に1回当番がまわって来る。なお、区長世帯は当番をしない。他に、高齢のため火の番を免除されている2世帯がある。当番をするのは各世帯の一人前の成人男女（高校生以上）でなければならない。昔は「女性では頼りない」ため男性でなければならなかったという。現在でもできれば男性が回るようにしているそうだ。また、火の番をするのは4月の雪解け後から12月に雪が積もるまでで、その正確な日付も区の委員会で決定される。

当番は1日3回、8時、13時、20時頃に順路に従って集落内を回り、朝の巡回の時は1軒ごと玄関の戸を開け、「おはようございます。今日1日、火の用心お願いします。」と声をかける。外出中の場合でも鍵がかかっていなければ戸を開けてガスなど火が点いていないか確認する。昼と夜は声はかけず回るだけである。巡回する際ガラガラ棒と拍子木を持つ。ガラガラ棒は木の棒の上部に金具がついたもので、これで地面を突いて音を立てながら歩く。拍子木は各家で持っているが、ガラガラ棒は持回りで、夜の巡回後か翌日の朝に次の当番の家へ持っていく。当番の名前が順番通りに書かれた札もあり、これも一緒に次の家に渡す。

火の番がするのは火の用心を呼びかけることだけではない。当番は朝の巡回前に区長の家に立ち寄り、チラシ等があればその配布や、連絡事項の伝達も行う。広報やお知らせなどが配布物の主なものである。また、月、木曜日に当番になった人は、ごみ処理車が去った後のごみ捨て場の掃除もする。火の気に限らず、何か異常はないか、不審な人はいないかなどにも注意する。当番は単なる「火」の番ではなく、その日1日の責任者、用心棒のような役割を果たしているという。何かあるとすぐ「今日の火の番の人は誰だ」ということになる。Mさん（56歳女性）は、「火の番は責任があるから怖い。夜の回るのが終わると『ああ、これでうれしや』と思うものだ」と言っていた。

以上のような火の番に対して、中宮の人々はどんな考えを持っているのだろうか。どの程度重要に思い、また逆に負担に感じているのか。

- ・「火の番が実際に火事を見つけることはあまりないが、回っていれば見つけられる。月に1回のことだから気にならない」（70歳女性）
- ・「以前は1日に5回や6回、回っていたが、今は3回になって楽になった。前は当番の日は仕事など何もできなかった。当番がまわって来る前に雪が積もって終わりになったのでうれしかった」（75歳女性）
- ・「雨の日とかはやめてしまう人もいるが、10分か15分で済むことだから普通はやる。良心がとがめるし」（83歳男性）
- ・「火はどこでも使うものだから、火の用心をするのはいいことだ」（84歳男性）
- ・「今はそれほど緊迫した気持ちでやってはいないが、防火意識を弱めてはいけないという考えがある」（48歳男性）

・昔は火に対して神経質だったが今はちょっと緩んできている。本当は気を緩めてはいけないのだが…」(46歳男性)

・「連絡には有線があるが、配布物も多いから火の番の人は必要だ」(56歳女性)

これらの話から、中宮の人々は、多少面倒には感じながらもやはり火の番、防火は重要であると考えていることがうかがえる。一方で、昔と比べると人々の防火意識はやや薄れてきているというのも事実のようだ。上の話の中にもあるように、火の番は2年ほど前まで1日5回巡回していた。それが3回になったのは、戸数が減ってきたこと、もう少し緩めても良いのではという声が区民から出てきたことなどによる。これに関してYさん(83歳男性)は、「火事はたいてい子供が原因。子供が減ったし、そんなに心配ない。たくさん回るとかえっておそろになるのでは」と話す。

3回になったといってもまだ昼間に回らなくてはならないし、仕事のある日など大変なように思われる。しかし皆、「仕事などで都合が悪い場合は他の家の人に代わってもらおう。お互い様だし気軽に頼める。」と本当にたいしたことではなさそうに言う。「簡単に代わってもらえる。中宮ではそういうつき合いをしている」(51歳男性)とのことであった。なお、代わりを頼む相手は、やはり「近い親類」が多いそうである。

また、代わりをしてもらう時に人夫賃を払うこともある。普通に代わってもらおうと、別の日にその分の当番をすることになるが、人夫賃を払ってしてもらった場合はその必要はない。しかし「人夫賃を払うことはあまりない」という。一方で、いろいろな人の代わりによく回っている人もいるという話も聞いた。人夫賃を払うことが本当にあまりないのならば、それほど厳密に当番の日を入れ替えて代わりをし合っているわけではないということだろう。おそらく、またこちらでも代わってもらうこともあるからと、お互い助け合っているのではないだろうか。

仕事を休んで火の番をすることもある。例えばある家では、夫の仕事の日に当番になった場合は、週末などの休みの日に代わってもらおうか、あるいは妻が仕事を休んで火の番をする。また、1960年代頃まで、中宮ではかなり多くの人が北陸電力に勤めていたのだが、3交代勤務だったため、火の番の日には勤務のほうを代わってもらっていたという。

このように、人々は火の番を負担に感じないわけではないがその必要性を認めており、相互の助け合いできちんと続けている。だが1945年の大火以後現在まで、小さなぼや以外に火事は発生していないといい、また、昔のようにかやぶき屋根やいろりを使うこともなく、特に火事が起こりやすいということはなさそうに思われる。人々の防火意識が弱まってきても不思議ではないだろう。この防火意識について、もう少し検討していく。

IV 人々の防火意識

火の番の回数が減少したことの理由の1つに、もう少し緩めても良いのではという区民の声があったことから、人々の火災に対する警戒心は昔と比べ弱まってきていることが想像できる。大火を経験した人は、その恐ろしさが強く心に残っているため火の番を重視するが、経験していない世代の人はやはり違うらしい。Yさん(75歳女性)は、「年寄りは一丁に回るけど若い人はおうちゃく。だから、昔は年寄りでは駄目だと言われたが今は何も言われない」と話していた。

火の番の順路を見ると、朝各戸を訪れるとき以外は、つまり昼と夜の巡回時は、主要な道筋を歩くだけであり、全ての家の前を通るというわけではない。以前からこの順路だったのかもしれないが、1日5回だった頃はそのうち3回は各戸をのぞいていた。火災についての異常の発見という役割を果たすためには、現在の巡回方法では実際は不十分であると思われる。ところがたいていの人には楽になって良かったと思っており、心配する声はわずかであった。

しかし、このことから単純に、火の番は形式的に行われているに過ぎず、防火意識を持って実行されてはいないと決めるけることはどうかと思う。というのも、その防火意識を弱めてはいけないという考えがあるからこそ火の番が続いていると言えるからだ。異常の発見という役割は不十分でも、火の用心を促すという役割は果たしているのではないか。ただ、当番の人が声をかけたり、拍子木やガラガラ棒で音を立てるから火の用心を意識するというよりは、区民がそれぞれ当番を負担することによって意識を保っているのだろう。子供の火の番を始めさせたのもそのためであった。

区民の防火意識を維持しようとする一方で、観光開発事業のための妥協もある。中宮では過疎化が進んでおり、その対策として1984年白山中宮温泉スキー場が開設された。するとスキー客の中から花火やバーベキューをしたいという要望が出るようになり、区はスキー場の催し物による火の取り扱いについてはスキー場の管理に任せることとした。これを決定する時にはやはりもめたのだという。しかし一般の区民からは、取り立ててそのことを気にするような話は聞かれなかった。スキー場では花火大会も行われているが、冬だから別に構わないとのことである。

防火意識には個人によって違いがあるだろうが、全体としては、やや薄れてきているものの、なお防火意識を維持しなくてはという考え方が優勢であるようだ。くわえ煙草の禁止についてもほぼ守っており、他人がしていたら注意すると話していた。

火の番は、中宮独特のものというわけではなく、吉野谷村の他の区や、尾口村の尾添、瀬戸などでも昔から行われてきたそうである。「この辺は山だし、それに昔はかやぶき屋根で、いろいろも使ってたから、どこでもたいてい大火にあっている。だからみんな火の番をしている」という。また、昔は鶴来でも行っていたとか、京都で奉公していた頃(昭和初期以前のことである)、そこでも火の番があったという話も聞いた。中宮の人々にとっては、自分たちが生まれた時からあり、周辺の村にもある火の番は少しも特別なものではないのである。

しかし中宮では、家を残したまま生活の中心を鶴来や金沢、野々市などに移してしまった世帯が増えており、そのような居住形態と関連して、火の番を取り巻く現状は幾分特異なものになっているような印象を受ける。以下ではその点について述べる。

V 不在世帯と火の番

火の番は中宮では区民の第一の条件として区の規約でも定められている。区民の条件としては他に区の人夫をすること、中宮に持ち家があることが定められており、これらを満たしていなければ区民とは見なされないが、逆に言えば区民であればたとえ普段不在の世帯でも火の番や人夫をしなければならない。また、中宮に家が残っており、その家の電気、水道が使用可能な状態ならば、区民かどうかに関わらず火の番をすることになっている。現在中宮にある68世帯のうち、約3分の1の世帯が何らかの理由で常住していない。そのうち借家に居住する1世帯は、火の番等はせず、中宮区年間居住経費として3万円を支払っている（区民としては扱われない）。その他の世帯は、32日に1回まわって来る当番をどうしているのだろうか。冬期のみ鶴来や野々市で過ごしているという世帯は、冬は火の番もないので問題はなさそうだ。週末のみ中宮で過ごす世帯や、ほとんど中宮では居住しないという世帯であるが、彼らはたいてい次のうちどちらかである。

まず1つめは、誰か別の人に代わりに火の番をしてもらっている世帯である。前にも書いたように、不在者に限らず、当番の日に都合が悪い場合には代わってもらうことが多い。不在者の中には、中宮在住の親や姉妹などが代わりにしていることもある。

2つめは、人に頼まず、当番の日は鶴来などから火の番をするために来るという世帯である。意外にもこの方法をとっている世帯が最も多い。もちろん、代わりを頼む世帯は毎回頼み、自ら来る世帯は毎回来るというわけではなく、この2つは混ざっていると思われる。しかし概して、当番の日にはきちんと来るという世帯が多い。また、不在者の代わりに常住の親類が火の番をするのと逆に、中宮に住む高齢の親の代わりに中宮外から子供が火の番をしに来ることもあるという。

上で述べた不在世帯には、夏の間中宮温泉で働き、あとは中宮に居住するという世帯は、少し性格が異なると思われるため含めていない。中宮温泉で働く世帯では、火の番の時のみ帰って来たり、経営する旅館の従業員が代理で来たりしている。1日5回巡回していた頃は、当番の日は1日休まなければならなかったが、今は回る時間のみ来るということができる。

普段は鶴来や金沢等に居住しているが火の番をするという世帯のうち、火の番以外には全く中宮に戻らないという世帯は少ない。畑などが中宮に残っているため手入れをしに来るとか、夏の間は時々訪れる、お盆は中宮で過ごすなど、その世帯の全員でなくとも誰かが行き来しているようである。常住していない世帯がなぜ火の番をしなければならなくても家を維持しているのか、

中宮在住者に尋ねたところ、「やっぱりお盆などには帰って来たいからだろうねぇ」ということであつた。

これらの世帯はたいてい、仕事のためか、あるいは鶴来などに住む子世帯との同居のために現在のような居住形態をとっている。彼らが1年のうち数日間でも中宮で過ごしたい、家を残しておきたいと思えば、このようにするしかないのである。

火の番をしない世帯はその家の電気、水道などを停止し、もう居住しない状態になっている世帯であり、区としてはそれ以後は区民として扱わない。配布物や連絡事項も伝えない。それらの世帯は、中宮在住の人々にとってももう「中宮の人ではない」と認識されている。火の番をし、お盆など年に数日間のみ中宮に居住する世帯のことはどうかというと、この場合は「中宮の人」であるようだ。火の番が区民の第一の条件であると聞いた時、このような認識になって当然だろうと思ったのだが、実は人々の認識を分けているのは火の番をしているかどうかではないらしい。

人々の認識の基準になっているのは、もっと単純なものであつた。それは、中宮と関わりを持っているかということである。お盆や週末のみ中宮で過ごす人のことを常住者に尋ねても、誰がそうなのかあまりはっきりしていなかった。忘れていたわけではない。「そう言えばあの人も最近ずっと下のほうに住んでいるなぁ」といった感じで、特に区民であるか否かなど区別して考えていない様子なのである。つまり、人々にとっては不在者も「中宮の人」であることには変わりなく、ただ鶴来などの家に居住している期間のほうが長いというだけなのだ。中宮では鶴来や金沢、野々市などにも家のある人が多く、珍しいことではないため、「引っ越した」という感覚はないのだろう。このように、火の番をしているかどうかで区別しているようには感じられなかった。

とはいえ、人々が「中宮の人」であるとする人と、火の番をする人とは実際には一致している。しかし、人々の中に「火の番が基準である」という意識があるようには見えないのである。人々にとっては火の番はあくまでも区内の安全を守るためのものであるようだ。火の番をしているということは、区民としての活動に参加していることでもあり、また、火の番の時には当然皆と顔を合わせている。さらに、火の番以外にも時々来るという人が多い。だから「中宮の人」であると思われるのではないか。今後全く義務を果たすためだけに来るようになったり、火の番を代理の者がすることが多くなったりすれば、次第に変化していくことも考えられる。

中宮では若者の流出が激しく、進学、就職などで中宮を出て行った人はほとんど戻って来ないという。中宮常住世帯にも、高齢者のみの世帯は多い。Mさん（67歳男性）は、「年寄りだけ残っている家が多い。（その人たちが）いなくなったらどうなるのかなあと思う」と話す。夫婦2人暮らしのYさん（75歳女性）は、「将来子供の家に行くときには電気などを切っていくつもり」と話していた。このように、いずれ選択を迫られる時を迎える世帯は少なくないだろう。現在家を維持している世帯も、いつまで今のように行き来し続けるかは分からない。子供の世代になったら、火の番を負担してでも中宮に家や畑を維持しようとするとは考えにくい。Yさんは「もう

10年もしたら（中宮に残る戸数は）50軒ほどになるだろう」とも言っていた。

火の番は防火対策の一つとして行われ続けてきたものである。人々もまず第一に火災の責任者、用心棒として火の番を据えていることが調査中感じられた。しかし客観的に見ると、中宮において火の番が持つ意味といったものは変化していきっているように思う。

かつて中宮の人々にとっては、まさに火災が恐怖であり、それを防ぐため1日に何度も巡回していた。「年寄りでは駄目だと言われた」「女では頼りないから駄目だった」という話に表れているように、火の番は異常があったら即対処できることまで必要だったのだろう。また実際に、そのような者が火の番をすることが、当時の中宮では可能であった。100以上の世帯があり、若い人も多かった。しかし、生業形態の変化、世帯数の減少、世帯規模の縮小、高齢化などによってそれらは不可能になっていく。同時に、子供の数の減少、家屋の構造やエネルギー源の変化などにより火災発生の心配自体も小さくなり、火の番は自然に現在のような、かつてに比べて多少とも負担の少ない形に変化してきたのだろう。さらに、中宮に家を維持する場合は火の番をしなければならないことが区で定められているため、上に述べてきたような独特な居住形態に対応した火の番への参加のあり方も生じているのである。

人々の意識の中では、火の番は火の用心と異常の発見を目的とする、従来のものとほとんど変化していないようであるが、区民それぞれが当番を負担して成り立っているものだけに過疎化や高齢化などの影響も避けられないと言える。ただ、火の番に対する人々の据え方が変化していないのは、IVで触れた、防火意識を維持しようという人々の姿勢が保たれていることと繋がりがあるように思う。火の番の制度が将来どのようなようになっていくかは、地区の今後の変化と、そしてそれだけでなく、人々が防火ということをどう考えていくかにかかっているだろう。